

「小竹の葉はみ山もさやにさやぐとも」

塩 沢 一 平

1

小竹の葉はみ山もさやに 乱友 われは妹思ふ別れ来ぬれば(2・一三三)

柿本人麻呂の手によるこのいわゆる石見相聞歌の第一長歌の第二反歌は、第三句「乱友」が、古点ミダルトモ以来、ミダレドモ・サワゲドモ・サヤケドモ・サヤゲドモ・マガヘドモなど様々な訓みが試みられて来た。しかし周知のように、近代の細密な万葉研究の成果により、「乱友」は定訓を得ていないものの、近年の注釈の訓みは、ミダルトモとサヤゲドモとの二つが有力になりつつあるといつてよいだろう。^①

この「ミダルトモ」、また「サヤゲドモ」の訓みが、他方をそれぞれ排する理由として

(A)「ミダルトモ」が「サヤゲドモ」を排する主な理由は、

(1)「乱」を「サヤグ」と確実に訓む例が見いだせない。^②

(2)第二句の「さやに」は動詞「さやぐ」の語幹に「に」がついたもので、「み山もさやに」という、へAモBニという形式の定型句に続く句は、「山も狭に 咲ける馬酔木の」(8・一四二八)や「滝もとどろに鳴く 蟬の」(15・三六一七)のように、「B」と語幹を同じくする動詞が来た例が見いだせない。^③

があげられよう。また、

(B)「サヤゲドモ」が「ミダルトモ」を排する主な理由は、

(1)「ミダル」は、バラバラと散乱するもの、糸のように細長く入り乱れるものに用いられるのみで、枝のまま

の葉に「ミダル」と用いた例はない。

(2)「トモ」という仮定条件と結句の「別れ来ぬれば」という確定条件との間に齟齬がある。

この二点があげられる。

本稿では、(A) (B) それぞれの(1) (2)のポイントについて詳しく検討を加えることを中心としながら、この「乱友」の訓を定めることにより、この歌一首全体の解釈を試み、さらに人麻呂が石見相聞歌中のこの一首で何を形象化しようとしていたのかの解明を試みたい。

2

まず、(A)の(1)について。

集中での「乱」の一般に認められている訓みは、先に「乱友」の諸訓からもわかるように「ミダル」の他、「秋山に落つる黄葉しましくはな散り乱そ妹があたり見む」(2・一三七)などにみられる「マガフ」や、「松浦船乱堀江の水脈早み楫取る間なく思ほゆるかも」(12・三一七三)に一例をとどめる「サワク」がある。さらに、「聞乱」の二語で「マヨヒ」と訓むものもある。しかし、万葉集中の本文異伝を合わせた五八例を含め、上代で確実に「乱」を「サヤグ」と訓ずるものは一例も見いだせない。

ただし、注目すべき表記が記紀には残されている。神武

記の熊野の高倉下の献剣の条には「葦原中国は、いたく佐夜芸て有りなり」という記述が見られるが、これに対応する神武即位前紀戊午年六月の条には、周知のように「夫れ葦原中国は猶聞喧擾之響焉」と記されている。この部分の書紀訓注には「聞喧擾之響焉、此云左椰覽利奈離」と記されてもおり、「喧擾之響」が「さやぐ」に対応することになる。「喧擾」とは、「さわぎみだれる。ごたつきさわぐ。」こと「喧紛」の意とされる(『大漢和』)が、この「喧擾」の「擾」の表記が集中一例見られ、「草枕旅にし居れば刈薦の擾妹に恋ひぬ日は無し」(12・三一七六)のように「みだる」と訓ぜられており、古字書にも「擾」は「亂也」(『広韻』)「攪亂也」(『玉篇』)とある。この「喧擾之響」に関しては、沢瀉氏が「擾亂に伴つたさわぎで、天上から聞こしめせばさわがしいこゑであるが、もし見そなはせば擾亂のかたちである」とのべている。「さやぐ」が視覚を伴うか否かは別にして、「擾」が「乱」に通ずることから、「さやぐ」は「喧乱之響」ととることも不可能ではなからうし、当該一三三番歌の「乱」を「さやぐ」と訓んで、笹の葉の「喧乱之響」を当該歌から読み取ること也不可能ではなからう。

ちなみに、集中の「さやぐ」は、

a 葦辺なる荻の葉佐夜藝秋風の吹き来るなへに雁鳴き渡

る(10・二一三四)

b 小竹が葉の佐也久霜夜に七重かる衣に益せる子ろが肌
はも(20・四四三二)

右のように当該歌以外に二例見られる。当然「さやぐ」の
総てが神武即位前紀のように「喧擾之響」の意となるわけ
ではなく、「さやぐ」の意味は、その他の例などを含め帰
納されねばならないのだが、この二例の「さやぐ」と
「喧擾之響」の意が重なり合う面は少なからずあるだろう。
また、記紀歌謡の

c 狭井河よ雲立ちわたり畝火山木の葉さやぎぬ風吹かむ
とす(記二一)

d 畝火山昼は雲とゐ夕されば風吹かむとそ木の葉さやげ
る(記二二)

右の二例は、神武の皇子当芸志美美命が皇后伊須気余理比
売を娶おうとして皇后の子三人を殺そうとした際に、皇后
がこの歌によつて災厄を知らせたとされるものであるが、
木の葉のさやぎに「喧擾(乱)之響」を汲み取り、それが
当芸志美美的謀叛の予兆として機能しているとするこも
強ち曲解とはいえない。

以上のように、神武即位前紀の「さやぐ」の訓釈「喧擾
之響」や、「乱」が「擾」に通ずることなどから当該一三
三番歌の「乱友」を「さやげども」と訓むことは一先ず不

可能とはいえない。

次に(A)の(2)について。

確かに諸注が指摘するように、へAモBニ」という定型
句には、Bと語幹を同じくする動詞が下接した例を見いだ
すことはできない。しかし、疑問とすべき例が古事記には
見られる。即ち「御頸珠の玉の緒もゆらに、取りゆらかし
て(母由良邇、取由良迦志而)、天照大御神に賜ひて詔り
たまはく(上巻)」という例が問題となるわけだが、「もゆ
らに」という例が他に記紀にもみられるように、⁽⁸⁾勿論「玉
の緒も、ゆらに取りゆらかして」ではなく、ここは「玉の
緒、もゆらに取りゆらかして」とするべきところであるが、
間宮厚司氏はそのあたりの不審に触れて、「ユラニトリユ
ラカスではなくモユラニトリユラカスとなっているのは、
単純な重複を回避した表現とみることができ、(中略)ト
リユラカスを修飾するのに、ユラニという副詞をそのまま
用いたのでは、ユラニのユラがユラカスの語幹そのものに
相当するので、修飾語としての効果が無い。そこで、状態
の高進を明確に示すために、接頭辞モを付着させた。そう
することで、モユラニはトリユラカスを修飾することが可
能になった。したがって、サヤニサヤグやトドロニトドロ
クといった(実際に例を見ない)意味をなさない単なる重
複表現と、モユラニトリユラカスとは、表現としての価値

が違うのである⁽⁹⁾として「サヤニサヤグ」の訓みを認めていない。

しかし、「サヤニサヤグ」を意味をなさない単なる重複表現とするためには、「さやに」と「さやぐ」とが語幹を同じくするということを認めること、その「さやにさやぐ」という表現が単なる重複表現であること、以上の二点の前提が必要になるだろう。

山口佳紀氏は、万葉集におけるへAモBニの形式におけるBは、Aを主格として述語的な役割を果たすものが多く、ほとんどが動詞と密接な関係が考えられる動的な状態副詞であると指摘している。「さやにさやぐ」に関しては、詳しい記述はないものの、「さや」は動詞「さやぐ」と結びつくものであるとしている。しかし、氏も指摘する「枝もとををに(枝母等乎々尔)雪の降れば」(10・二三一五)「庭もはだらに(庭毛薄太良尔)み雪降りたり」(10・二三一八)「玉もゆららに(玉毛湯良羅尔)白栲の袖振る見えつ」(13・三二四三)の例があることから分かるように「Bニ」の部分に動詞の語幹が必ず現れるというわけではない⁽¹⁰⁾。

また、「さや」は音の意味とは関係なく「清(澄也潔也)」の意味を持つものが存在し、「冴ゆ」もこの範疇に属

し、対して「さやぐ」は或る音そのものがするという「さやさや」という系統に属し、「さや」という音がする(たてる)という意味になるという説もある⁽¹¹⁾。これらの説を鑑みるに、「さやに」の「さや」が動詞の語幹でない可能性も含めて、「さやに」と「さやぐ」とが語幹を同じくするかどうかは、なお慎重を要する。

次に「さやにさやぐ」が「山がざわめくばかりにざわめいてゐるが」といふ「意味をなさない」重複表現であるか否かは、「さやに」と「さやぐ」の意味を一つ一つの用例から帰納していく必要があるだろう。

集中「さやに」の用例は、当該歌を除いて次の七例見られる。

①……黄葉の 散りの乱ひに 妹が袖 清尔も見えず
…… (2・一三五)

②あしひきの み山も清 落ち激つ 吉野の川の 川の
瀬の 清きを見れば…… (6・九二〇)

③……時となく 雲居雨降る 筑波嶺を 清照らして……
(9・一七五三)

④若月の清見え雲隠り見まくそ欲しきうたてこのころ
(11・二四六四)

⑤日の暮に碓氷の山を越ゆる日は背なのが袖も佐夜尔振
らしつ (14・三四〇二)

⑥足柄の御坂に立して袖振らば家なる妹は佐夜尔見もかも (20・四四三三)

⑦雲雀あがる春へと佐夜尔なりぬれば都も見えず霞たなびく (20・四四三四)

塩谷香織氏は、この七例の内、多少疑義のある②を除いた用例はすべて「澄・潔」を内包した視覚的な「明らかさ」を意味するものであるとしている。確かにほとんどの例が視覚的な「明らかさ」を意味してはいる。しかし⑦はどうであろうか。この⑦は「三月三日に、防人を検校する勅使と兵部の使人等と、同じ集ひ飲宴して作れる歌三首」の内の一首で、安倍沙美麻呂の「朝な朝なあがる雲雀になりてしか都に行きてはや帰り来む」(20・四四三三)に答えた家持の歌である。「雲雀あがる春へとさやになりぬれば」は「朝な朝なあがる雲雀になりてしか」を受けたままで、実景として「ひばり」を目の当たりにした視覚的な「明らかさ」を表すとは言い切れない。「三月三日」は穀雨の前日、太陽暦の四月二十二日にあたり、⑦の上三句は「いよいよ、雲雀さえずる春の季節が定まったので」(中西『全訳注』)などと解するべきで、⑦の「さやに」は「シルクと同じく、顕著に、歴然と」(木下『全注』)という意味でよく、つまり「明らかさ」を表すが、それが必ずしも視覚的とはいえない。

又②は「サヤニは音の形容なり。ザアザアトなど譯すべし」(井上『新考』)とあるように滝が立てる音の形容であるとする説や、「サヤニは清々しく景色よくして。」(『私注』)というように視覚的ともとりうる「さわやかさ」であるとするもの、「すがすがしく」(小学館『全集』)「さやかに」(『集成』)と視覚・聴覚のどちらとも明示しないもの、さらに「対象が視覚聴覚を通して主体に与えた印象の清明さをあらわす」(吉井『全注』)というように明確に両覚を含むとする説もある。

以上七例を検するに、「さやに」は視覚に限定することなく、⑦のように対象が与えた「明らかさ」をあらわすことがその基本であり、それが視覚的な場合が多く、②のように双方を含み込んだ「明らかさ」の場合もあるとするのが穏当であろう。

つぎに「さやぐ」について。

「さやぐ」は前述のように集中当該歌を除いて二例見られる(前掲 a・b)。記紀には先にあげた二例の歌謡(前掲 c・d)の他にもう一例の歌謡

e……綾垣の ふはやが下に 蚕糸 にこやが下に 栲
衾 さやぐが下に 沫雪の 若やる胸を……(記六)

と、これも先にあげた

f葦原中国は、いたくさやぎてありなり(記中巻……紀

では「さやがりなり」

と同様な表現が天菩比神の派遣の条にも

g 豊葦原之千秋長五百秋之水穗国は、いたくさやぎてありなり（記上巻）

見られ、風土記や祝詞にも見られる。

h 高浜の下風さやく妹を恋ひ妻と言はばやしことめしつ
も（常陸風土記）茨城郡）

i……掘り堅めたる柱・桁・梁・戸・まとの錯ひ動き鳴る事なく、引き結へる葛目の緩び、取り葺ける草の噪きなく、御床つひのさやぎ、夜目のいすすき、いづつしき事なく、平らけく、安らけく護りまつる神の御名を白さく……（『祝詞』大殿祭）

これらの用例から推定し得る「さやぐ」の幾つかの語感・機能がある。

(I) a・c・dからもわかるように、風が吹くことの予兆となる。

(II) c・dは古事記の叙述に従えば、忌むべき事態の予兆となる。hも同様である。iについて少しく解説を加えるならば、iの「さやぎ」は連用中止法となっており、「いすすき」「いづつしき」と対をなしている。これらは「事なく」という部分に意味上つながっていくことから否定されるべきものである。「御床（宮殿）の神霊が起こし

うる（忌むべき）騒ぎ」（括弧内引用者）を鎮めようとする祝詞の文言である。

(III) eは須勢理毘売が八千矛神を床に誘う夫婦の交歓を求めた歌の中のものである。契沖はつとに「さやぐ」に「騒ぐ」に通じるものと「清やか」に通じるもののあることを述べ、記のこの歌は後者であるとしている（『厚顔抄』）。床に誘う歌であることを考えると「清やか」な音であるところたいと云うところが、『稜威言別』が「枲はこはかれば音のさやぐを云。喧擾は、もののかしましく鳴さわぐを云」というように「枲衾 さやぐ」とは、「さやさやと音をたてる」ことではなく、真つ白な楮の夜具が擦れ合いざわざわと騒がしい音をたてることを指すものと考えられる。ただし西郷信綱氏が「綾垣の ふはやが下に 蚕衾 にこやが下に 枲衾 さやぐが下」は視・触・聴にわたる三連句であると指摘していることからもわかるように、「ざわざわとした騒がしさ」は、このコンテクストの中では、ネガティブな心象を与えるものではなく、夫婦の交歓を象徴する枲衾の立てる音であることは確かである。

(IV) bは「霜夜」とあることから常識的に考えて「さやぐ」は「小竹が葉」の葉づれの音であろう。eも今述べたように夜具の擦れ合う音である。また、hも「浜を這うように吹き上げる風が木々（の葉）を動かして音を立てる

「意」⁽²¹⁾で、iも御床が擦れ合うことよって起きる音のこと、つまり「さやぐ」は物が擦れ合うことで起きる音をさすものであるといえよう。

(V) hの「下風さやぐ」の「下」にはシタ(心)の意が懸けられており、hの場合「さやぐ」には心の乱れ・心の騒ぎをくみ取ることができる。iも鎮(静)めるべき神霊の騒ぎをあらわしている。

(VI) fは熊野の神が、gも国つ神がまつろわぬ、つまり平定されていない状態であることを表す。

このように(I)〜(VI)までの六つの「さやぐ」の語感・機能からは、「さやに」に見られた「明らかに」に類する意味は全く見出せなかった。つまり「さやにさやぐ」という表現は、意味をなさない単なる重複表現とは言えないことになるのである。

以上まとめて帰納すると(I)〜(VI)までの「さやぐ」の語感・機能は次のように述べることができよう。

「さやぐ」はその用例の多さからも、通説にいうように木の葉が葉擦れして摩擦音を出すことを原義としていると考えて大過なく、その音が人々に「喧擾」なるものと感ぜられることから、神霊や人の心が鎮まらないことや、忌むべき事態(またはその予兆)となる。また「喧擾」なる状態は風が吹いている状態につながることから、風が吹くこ

との予兆ともなる。「さやぐ」は基本的に忌むべき否定的なイメージを持つもので、例外的に好ましい摩擦音をもいうことがある。ただし、その場合も現代語でいうところの「さやさや」という清爽なイメージをもったものではなく、あくまでも「ざわざわとした騒がしさ」を表すといつてよからう。

「さやに」と「さやぐ」のそれぞれ語感・機能を考え合わせる限り、やはり「さやにさやぐ」は単なる意味をなさない繰り返しではないものと考えられる。

3

次に(B)の「サヤゲドモ」が「ミダルトモ」を排する点について検討してみたい。

(1) についていえば、集中「ミダル」は五十余例を数えるが、枝のままの葉を「ミダル」といった例は一例も見いだせない。しかし、糸様の柳や藻の乱れが集中に存在することは、「ササの葉の乱れ」という表現を全くありえないものとするにはなるまいと思われる。『葉のソヨグこととミダルというのはふさわしくない』⁽²⁴⁾かもしれないが、枝ながら乱れるのである」との意見もある。確かに幅数センチの糸様といえなくもない笹の葉が「枝ながらに乱れる」ということを「ミダル」と表現することは不可能とは

いえまい。ただ、笹（又は木の葉）が「ミダル」という確例が見いだせないこと、それとは逆に「さやぐ」の用例の a ~ d に見られるように、笹（又は木の葉）が「さやぐ」確例があることから、笹の葉が「ミダル」という表現の存在を積極的に肯定するまでには至らない。

(2) について間宮厚司氏は、集中当該一三三番歌と同様に、第三句に逆接の接続助詞がきて、倒置法となつて結句に〈已然形+バ〉の条件句が来る仮名書例(三例)と、倒置法をもとに戻した、〈已然形+バ〉の条件句が第四句にくる仮名書例(二例)のすべてが、逆接の接続助詞は「トモ」ではなく「ドモ」となつており、対して第三句が逆接の接続助詞「トモ」となつている場合には結句の条件句は〈未然形+バ〉となること(一例)を確かめている。²⁵⁾

「これは、ドモは逆接確定条件を示すので、〈已然形+バ〉の確定条件と呼応した。それに対してトモの方は逆接仮定条件を示すので、〈未然形+バ〉の仮定条件と呼応したと判断される」と間宮氏は指摘している。氏はさらに、集中トモという条件に対しては、推量のム、反語のメヤ(モ)、未然形+バ、反実仮想のマシなど将来の事柄に係して表現する語が来ており、対してドモの方は、ズ・ナクニ・ナフなどの否定、形容詞(内訳は終止形・連体形・ミ語形)、気付きのケリ、現在推量のラム、過去推量のケ

ムなど現在及び、それを遡る時点の事柄に係して表現する語が来ると述べている。

如上の考察などから氏は、当該歌の結句「別れ来ぬれば」に対応する「乱友」を「みだるトモ」と仮定条件で訓むことは、当時の語法に照らして不可能と結論づけている。

明快な論のように思われるのだが、しかし、二つの点でこの意見には従えない。

まず一点は、つとに佐伯梅友氏が「ささなみの志賀の大わだ淀むとも昔の人にまたも逢はめやも」(1・3・31)の例などからまとめたように、既定の事実に対しても「トモ」を使う、つまりいわゆる修辭的仮定法があるということ²⁶⁾とや、「人はよし思ひ止むとも玉鬘影に見えつつ忘らえぬかも」(2・149)などに見られるように、「トモ」と呼応する部分に現在の時点の事柄に係する語が来る場合があるということである。つまり「我は妹思ふ」という終止形で結ばれる形や「別れ来ぬれば」という原因理由と呼応する形が、必ずしも「ドモ」でなくてはならないというわけではなく「トモ」であつても差し支えないと考えられるということである。

右に挙げた三一番歌は、第三句の「トモ」に呼応している結句が「メヤモ」であり、構造上は、先の間宮氏が指摘した仮定条件とその呼応の範疇にふくまれるものとなつて

いるが、内容としては「ささなみの志賀の大わだ淀むとも」は既定の事実を含んだものとなっており仮定条件とは言い切れない。又一四九番歌の「トモ」は仮定条件ではあるが、呼応する表現は、「忘らえぬかも」となっており、「将来の事柄に関係して表現する語」ではなく、間宮氏が「ドモ」という条件と対応すると指摘していた「否定」の表現の「ズ」（の連体形の「ぬ」）が来ているのである。

さらに二つめとして、当該歌と類想歌となっている人麻呂歌集歌

高島の阿渡川波は驟軛われは家思ふ宿悲しみ（9・一六九〇）
とその類歌

高島の阿戸白波は動友われは家思ふ廬悲しみ（7・一二三八）

の二首の第三句が「……トモ」と訓みうるということがあげられよう。

この二首は、先に間宮氏が確定条件と呼応するとした形容詞のミ語法「宿（廬）悲しみ」で結ばれている。これに對する第三句は、一六九〇番歌では、古点が「サワクトモ」と訓んでおり、一二三八番歌も『元曆校本』に「サワクトモ」（右に赭「トヨメ」、「ク」の左に墨「ケ」）、『類聚古集』に「トヨムトモ」（墨で「トヨ」を消し、右に墨

「トヨ」とあり、次点本では「友」を「トモ」と訓んでいた形跡が見られる。当該一三三番歌をも含めて三首とも古点では、結句の確定条件に呼応する第三句を「……トモ」と訓んでいるということとなるのである。一六九〇番歌の「軛」、一二三八番歌と当該歌の「友」は「トモ」「ドモ」両方の訓みが可能なものであり、軽率に古点だけを根拠に当該歌の「友」を「トモ」と訓むことはできないだろうし、だからこそ一六九〇番歌も仙覚が「サワケトモ」と改訓し、一二三八番歌も先の次点本の墨・赭や、その他「ドモ」と訓んでいる諸本が存在するとも考えられるのである。

しかしながら、左のように、

春山は散り過ぎぬ軛三輪山はいまだ含めり君待ちかてに（9・一六八四）

ぬばたまの夜霧隠りて遠く軛妹が伝は早く告げこそ（10・二〇〇八）

万代に携はり居て相見軛思ひ過ぐべき恋ひにあらなくに（10・二〇二四）

荒磯越し外ゆく波の外ごころわれは思はじ恋ひて死ぬ軛（11・二四三四）

人麻呂歌集歌における逆接表現に用いられる接続助詞「軛」の他の用例のすべて（四例）が「トモ」と訓みうる

ことから、鉄野昌弘氏は、一六九〇番歌の「柄」も同様に訓むべきで、その類歌一二三八番歌の「友」、類想歌となつてゐる当該人麻呂歌の「友」も「トモ」と訓むべきであると詳細に指摘しているのである。²⁷⁾

以上二点を鑑みるに、当該歌の「友」は「トモ」と訓むるのが最も穩当であり、従つて「乱」は、終止形で訓むこととする。

4

「乱友」の訓みの可能性を、現在有力となりつつある「ミダルトモ」「サヤゲドモ」を比較検討しながら探つてきたが、「2」で前述したように、集中「乱」は、そのほか「マガフ」や「サワク」とも訓まれている場合があつた。当該「乱友」の「乱」も「マガフ」「サワク」と訓む可能性はまだ残されている。この点を検討したい。

当該歌の「乱」を「マガフ」と訓むのは、契沖『代匠記』(初)の一案にはじまり岸本由豆流『万葉集攷證』・亀井孝氏(「柿本人麿訓詁異見」『国語と国文学』27巻3号一九五〇・三)がいずれも「乱友」を「マガヘドモ」と訓むかたちで従つた。その「マガフ」だが、集中確實に自動詞「マガフ」と訓み得る例(又はその連用形が名詞化したもの)で仮名書のもの左のように五例あり

梅の花散り麻我比たる岡傍には鶯鳴くも春かた設けて
(8・八三八)

妹が家に雪かも降ると見るまでにここだも麻我不梅の花かも
(8・八四四)

あしひきの山下光る黄葉の散りの麻我比は今日にもあ
るかも (15・三七〇〇)

世間は数なきものか春花の散りの麻我比に死ぬべき思
へば (17・三九六三)

……平布の崎 花散り麻我比…… (17・三九九三)

どれも花又は黄葉が「散る」ことにのみ用いられ、その内八四四番歌を除く四例が「散る」を伴つた表現となつており、また、当該歌を除き、一般に植物についての歌の中で自動詞の「マガフ」と訓ぜられてゐる漢字例は、すべて「散る」を伴つてゐるともいふ。やはり山田孝雄氏がつとに指摘してゐるように「マガフ」は散ることに關してのみ用いられる語と言つてよく、当該歌は「散る」の語も伴つておらず「小竹の葉」が「散る」ことを表したわけでもない。亀井氏を最後に従うものもなく、「乱友」の「乱」は「マガフ」という訓みから除くこととする。

次に、「サワク」の可能性を見てみよう。

先に当該歌の類想歌とその類歌として挙げた「高島の……」の二首(9・一六九〇、7・二三八)は当該歌と

「〜は〜ともわれは〜」思ふ〜原因理由」という構造をもっている点では同じである。³⁰ しかも、一六九〇番歌は人麻呂歌集歌でもある。とすると「乱友」を「サワクトモ」と訓みうるのではないかと考えられよう。しかし、構造が近似するからといって表現も全く同様であるとは即断できない。というのも、「サワク」の仮名書き例を見ると、集中二十一例見られ、鳥（十例）・人（六例）・波（五例）の三つに限られ、小竹の葉が「さわく」という確例を見出しえないからである。又、当該歌を除き、一般に「サワク」と訓ぜられている漢字例二十例あまりを見ても、人又は人が発する音、鳥・河蝦・蠅・波によるもの以外の「サワク」の例は、波に限られるのである。

植物が「サワク」という表現例が全く見いだせない以上当該歌の「乱」を「サワク」と訓む蓋然性は低いと言わざるを得ない。

5

以上「1」から「4」までに細かく確かめてきたように、当該一三三番歌の「乱」は「サヤグ」と、そして「友」は「トモ」と訓ずるのが最も適切であった。このことから当該歌の「乱友」は、「サヤグトモ」と訓む蓋然性が高いと

考えられる。そして「乱友」を「サヤグトモ」と訓む場合、「3」で述べたように「友（トモ）」は修辭的假定法つまり、現在を含みつつ未来にまで渡る逆接を表すものであると考えられる。

この「サヤグトモ」という訓は管見の限り従来はなかったものであり、このように訓むことにより、後述するようにな、人麻呂が当該歌によって形象化しようとしたものの新たな側面が顕在化してくるのではないだろうか。

ところで、当該歌の「乱」を従来「サヤグ」と訓じていた論（——「乱友」を「サヤグドモ」と訓じている点は従えない——）も全く対立する二つの解釈に分かれている。

一つは、「乱」を「サヤグ」と最初に訓じた『桧婦手』が「み山とよみてさやげども、それにも紛れず……」と解し、『美夫君志』（心なく風に鳴りさやげども、それにもまされ忘れる事なく……）、鴻巣『全釈』（山ノ中ガザワザフト音ヲ立テテ、篠ノハガ騒イデ居ルケレド）や、新編小学館『全集』（全山さやさやと風に吹かれ乱れているがそれでも……）、頭注に「サヤグはソヨグと同じく顛動する意。ここは全山を蔽う笹の葉が乱れて鳴り響き、無気味な山中の感じを表す」とある）などにあるように、否定的な意味合いを汲み取る解釈である。

もう一つは、北島葭江氏が早く「秋風に戦ぐ音は山に清

澄な明るい趣を與へる」(『さやにさやぐ』について)『文学』3巻2号 一九三五・一〇)と解し、沢瀉久孝氏も

「この山の風趣を一入さわやかにすがすがしいものにして、サラサラと微風にそよいでいるか」とし、窪田『評釈』が「全山を占めてある笹の葉の葉ずれの音と、わが沈んだ心との対照であつて……」と述べ、近年の注釈・論文でも従うものが多い³⁴⁾明るく清爽な肯定的な意味を含む解釈である。

「2」で詳述したように、集中の上代に見られる「サヤグ」には肯定的な意味を含むものは一例を除いて存在せず、その肯定的にとりうる記歌語(六)の一例も、栲衾のたてる「ザワザワ」とした騒がしい音と解するのが穩当であつた。当然当該歌の「さやぐ」も忌むべき騒がしい音を含んだものであるはずである。しかも、沢瀉説には駒木敏氏が指摘するように、サヤニサヤグ笹の葉ずれの「音」を「山の風趣」と抽象化するという置き替えも見られるのである³⁵⁾。肯定的な意味を含むとすると「作者は上三句で外界の明るさを描写し、下二句の暗い気分と対比させた」(小学館『全集』)ことにもなり、下二句を「今し別れて来た妹のことを思うて幽鬱な暗い心の道を辿つて居る」(前掲北島氏)という解釈も生まれて来てしまう。

いったい下二句「我は妹思ふ別れ来ぬれば」に「幽鬱な暗い心」を読み取ることができるのであろうか。第四句

「我は妹思ふ」に焦点をあてながらこのことを考えてみるならば、この人麻呂の「思ふ」とは、安騎野の歌(1・四五)の終末部「いにしへ思ひて」を中心として多田一臣氏が指摘し、太田豊明氏が多田氏のことばをまとめ直して確かめたように、「対象にはたらきかけ、その対象を『思ふ』主体の前に引き寄せる」「能動的な意志のあらわれ」であるとするのが最も適切であると考えられ、³⁶⁾「幽鬱な暗い心」を読み取ることにはいささか無理があろう。

石見相聞歌において、「見納めの山」³⁷⁾を越えて来てしまった人麻呂にとっては、「見る」ことによつて妹という対象を目の当たりすることが叶わない以上、「思ふ」という代替行為によつて妹を現前させようする以外にとりようはなかつたのであろう。

ただし、勿論それは、単に人麻呂の妹との惜別の情の強さだけからの行為ではあるまい。当該歌の直前に配置された第一反歌

石見のや高角山の木の際よりわが振る袖を妹見つらむ
か(2・一三二)

には現在推量の「らむ」が用いられているが、これはいわゆる視界外推量にあたり、人麻呂の位置からは、袖を振り返す妹の姿が見えないという述べようである。

足柄の御坂に立して袖振らば家なる妹は清に見もかも

(20・四四二三)

色深く背なが衣は染めましを御坂たばらばま清かに見
む(20・四四二四)

右の埼玉郡出身の防人歌に顕著にみられるように、一般に峠や山といった境界での袖振りに際しては、現実になれがお互いに見えなくとも見えると歌うことによってお互いの魂を招き寄せ、旅の安全を確かかなものとするものと考えられる。⁽³⁸⁾

しかし、人麻呂の一三二番歌では妹の袖振りが見えないことを述べ、自らの袖振りを妹が見ていることにも結句の係助詞「か」によって不安を抱いていることがわかる。しかし、だからといって、当該歌下の句において「一心不乱に妻を思う故にぜんぜん不安を覚えない」(新編小学館『全集』)というように「思ふ」ことによって自らの旅の安全をはかろうというものでもなからう。

一三二番歌と当該歌は、夫が旅中であること——勿論この場合は都に向かうのではあるが——や「らむ」が用いられていることから、いわゆる『留守歌』⁽³⁹⁾と非常に似通った形式をとった歌となっている。しかしながら留守歌の一般は、「わが背子は何処行くらむ奥つもの隠の山を今日か越ゆらむ」(1・四三)「朝霧に濡れにし衣干さずして独りか君が山道越ゆらむ」(9・一六六六)のように妻が旅

先にある夫の身を案じるものとなっており、発想は似通っているものの、当該歌では、推量している主体が全く逆になつてることがわかる。

稲岡耕二氏と神野志隆光氏が先鞭をつけ、近時福沢健氏が二氏の論を総合するかたちで論じているように、人麻呂の留京三首(1・四〇〇・四二二)が留守歌に連作による行幸讚美を盛り込み発展させたものであることを考慮するならば、一三二番歌も人麻呂による留守歌の発展のありようを見ることは不可能ではあるまい。つまり、一三二番歌において案ぜられているのは妹であり、妹にはなにかのネガティブな事態が想定されることとなるのである。当該歌に立ち戻つて考えるならば、「2」で詳述した「さやぐ」に見られた忌むべき事態の予兆という語感・機能は、妹に関するものであると理解することができるのではないだろうか。

人麻呂が当該歌で形象化しようとしていたものは、辺境の存在としての妹との別れに際して、その辺境との境界となる山を越えることによつて確実に失われていくこととなる妹を「思ふ」ことによつて引き留めようとする叶わぬ願いということになるであろう。そこに人麻呂は、再会期しがたい妹の喪失を笹の葉のさやぎというネガティブな予兆として機能する措辞に潜ませることによつて、妹との別れ

をより悲痛でしかも劇的なものとして表現していたのだと
考えられるのではないだろうか。

この見解が大過ないものであるとするならば、当該歌
は、

笹の葉は、全山にわたって清かに葉擦れの音を立てな
がら妹が自らのもとから永遠に失われて行こうとして
いることを告げていても、我は妹を思うことによつて
その妹を我が前に引き寄せる。既に別れてきてしまつ
たので。

このように解釈できるのではないだろうか。

注

(1) 「ミダルトモ」訓じているのは岩波『大系』、稲岡
『全注』など。「サヤゲドモ」と訓じているのは窪田
『評釈』、武田『全註釈』、沢瀉『注釈』、小学館『全
集』、『集成』、中西『全訳注』、小学館新編『全集』、伊
藤『釈注』など。「ミダレドモ」という訓は、「ミダル」
が上代の自動詞としての四段活用例が見いだせない、
つまり自動詞としては下二段活用の動詞であると沢瀉久
孝氏は指摘している(『み山もさやにさやげども』『万葉
古径』一 一九四一・六)。以来、この訓を採る注釈は
土屋文明氏『万葉集私注』(一九四九・九)を最後に管
見の限りない。沢瀉氏の説は従うべきと考えられ、「乱

友」に対する「ミダレドモ」の訓は検討の対象から予め
除外することとする。

(2) この指摘は、「ミダレドモ」と訓じている山田孝雄氏
『万葉集講義』(一九三二・三)に早く見られる。

(3) 大野晋氏「柿本人麿訓詁断片(四)」『国語と国文学』
26巻10号(一九四九・一〇)など。

(4) 沢瀉氏前掲(1)『万葉古径』一。

(5) 間宮厚司氏「小竹の葉はみ山もさやに乱友」(萬葉集
133番)の訓釈について『鶴見大学紀要』第25号
(一九八八・三)。

(6) 今年行く新島守が麻衣肩の紕は誰か取り見む(7・一
二六五)。

(7) 沢瀉氏前掲(1)『万葉古径』一。

(8) 「ぬなとももゆらに(母由良迹)」(記・上巻)、『瓊響
瑤瑤』の訓注「奴儼等母々由羅尔」(神代紀)など。

(9) 間宮氏前掲(5)。

(10) 山口佳紀氏「古代日本語文法成立の研究」第二章第七
節(一九八五・一)。

(11) 『岩波古語辞典』(一九七四・一二二)、塩谷香織氏「さ
さの葉はみ山もさやに乱るとも」『万葉集研究』第十二
集(一九八四・四)など。

(12) 大野氏前掲(3)。

(13) 「清照」は舊訓「キヨメテラシテ」であつたものを、
真淵が「サヤニテラシテ」と改訓したもので、中西『全
訳注』は『童蒙抄』の訓み「サヤカニテラシ」をとって

いるが、最近の注釈が殆ど従う「サヤニテラシテ」をこ
こでは「清照」の訓とする。

(14) 塩谷氏前掲(11)。

(15) 内田正男氏『日本暦日原典』(一九七五・七)、湯浅吉
美氏『日本暦日便覧』(一九八八・一〇)。

(16) 他に『大系』、桜井瀧氏現代語訳対照『万葉集』など。

(17) 他に中西『全訳注』など。

(18) 紀神代下にこれに対応した「彼の地未平」という「さ
やげり」と訓む可能性のあるものがあるが、ここでは留
保して触れないこととする。

(19) 武田祐吉氏校注『古事記 祝詞』(日本古典文学大系
一九五八・六)。

(20) 『古事記注釈』巻一(一九七五・一)。

(21) 秋本吉徳氏『風土記』(二)全訳注(一九七九・四)。

(22) 秋本吉郎氏校注『風土記』(日本古典文学大系 一九
五八・四)、秋本吉徳氏前掲(21)。

(23) 野田浩子氏は e・i に「神意・靈意を読みとるのは不
可能である」と述べている(「小竹の葉はみ山もさやに
さやげども」『万葉集の叙景と自然』初出一九八〇・一
一)が、(II)で述べたように、i に神靈の騒ぎは認め
られよう。

(24) 稲岡氏前掲(1)。

(25) 間宮氏前掲(5)。第三句に逆接、結句に「已然形十
バ」は「世の中を憂しとやさしと思へ杼母飛び立ちかね
つ鳥にしあらねば」(5・八九三)。他の二例は15・三六

七七、20・四三五一。結句の倒置法をもとに戻したものは「常磐なすかくしもがもとと思へ騰母世の事なれば留みかねつも」(5・八〇五)。もう一例は、17・三九八一。第三句に「トモ」の例は「秋萩ににほへるわが裳濡れぬ等母君が御船の綱し取りてば」(15・三六五六)。

(26) 「ハ淀むとも」考『万葉語研究』(一九六三・四)。

(27) 鉄野昌弘氏「人麻呂における聴覚と視覚」『万葉集研究』第十七集(一九八九・一一)。

(28) 塩谷氏前掲(11)。

(29) 山田氏前掲(2)。

(30) 「3」で示したように、第三句は「……トモ」と訓むものとして話を進める。

(31) 「蠅」は「五月蠅なす 騒く舎人は」(3・四七八)に見られ、「五月蠅なす」は枕詞だが、蠅の羽音が騒がしいことから「騒く」にかかるものとされているので例に加えた。

(32) 他に、井上『新考』、佐々木『評釈』、武田『全註釈』、中西『全訳注』、尾崎暢映氏「み山もさやに」『国学院雑誌』85巻10号(一九八四・一〇)など。

(33) 前掲(1)『万葉古径』一。

(34) 他に小学館『全集』、『集成』、駒木敏氏「小竹の葉のさやぎ」『同志社国文学』第三八号(一九九三・三)、伊藤『釈注』など。

(35) 駒木氏前掲(34)。

(36) 多田一臣氏「安騎野遊獵歌」(初出一九九〇・一一)。

- 「へおもひ」と「こひ」と」(初出一九八八・一〇)ともに『万葉歌の表現』所収、太田豊明氏「柿本人麻呂」安騎野の歌』考』『上代文学』第七五号(一九九五・一一)。
- (37) 伊藤博氏「石見相聞歌の構造と形成」『万葉集の歌人と作品(上)』(初出一九七三・五)。
- (38) 中西進氏「日本詩人選?」『柿本人麻呂』(一九七〇・一一)、尾崎富義氏「袖振」歌考』『上代文学』第二九号(一九七一・一一)。
- (39) 上野理氏「留京三首における人麻呂の方法」『国文学研究』第七五集(一九八一・一〇)。
- (40) 稲岡耕二氏「連作の嚆矢」『万葉集の作品と方法』(初出一九八三・一)、神野志隆光氏「松浦河に遊ぶ歌」追和三首の趣向』『柿本人麻呂研究』(初出一九八六・八)、福沢健氏「柿本人麻呂留京三首と伊勢行幸」『美夫君志』第五〇号(一九九五・三)。
- (41) 渡瀬昌忠氏「人麻呂文学の異空間」『日本の文学』第一集(一九八七・四)

「上代文学」投稿規定

- 1 投稿者は会員に限る。
- 2 投稿論文の分量は四百字詰め原稿用紙四十枚以内(注をも含む)とする。
- 3 投稿論文はワープロ原稿をも認めるが、その場合にはなるべく字間・行間をゆったりと組み、表紙に四百字詰め換算した枚数を記す。
- 4 投稿論文は原文でなく、コピー二部を送る。
- 5 投稿論文の表紙には、投稿者の住所及び勤務先(学生の場合は大学名、学部学科名または大学院課程名、学年)を記載する。
- 6 投稿論文の送り先は事務局とする。
- 7 投稿論文の締切日は特に設定しない。
- 8 投稿論文に対しては、部分的修正を要求する場合がある。
- 9 投稿論文の採否は、編集委員会の議を経て常任理事会で決定する。
- 10 投稿論文は返却しない。不採択の論文についてはその旨を通知する。